

## 次年度の技術対策

### (1) 土づくりによる気象変動に強い稲づくり

近年は天候の変動が激しく、このような気象条件下でも高品質・良食味米を安定的に生産するためには、透排水性の改良、耕深（根域）の確保、地力の維持・増強などの総合的な土づくりが重要となります。耕深を確保する、過度の代かきを避ける、有機質資材やケイ酸質肥料の施用等、登熟後半まで稲体の活力を維持できるような土づくりを目指しましょう。

また、使用する肥料の種類が多様化し、肥培管理もそれぞれ違ってきています。ほ場条件や肥料の特性を理解し、適切な肥培管理に努めましょう。

### (2) 基本技術励行による収量・品質の安定化

平成30年は、気象の影響により、全体の傾向として分げつの発生が少ない年となり、減収に大きく影響しました。また、地域やほ場条件により程度に差はあると思いますが、台風や強風、一時的な少照や低温など、各時期の気象要因も影響として加わることで、総合的に低収になったと考えられます。稲づくりの基本技術に加え、気象災害に対する技術対策により、安定した収量・品質を確保しましょう。そのためにも、今一度、健苗育成（活着良好な苗）、適切な田植え作業（時期、植込本数の確認、植付深の調整等）、生育ステージや気象条件に適応した水管理（浅水、深水、適期中干し、落水時期、カドミウム吸収抑制等）等の基本技術を見直しましょう。

- ・活着を良くするための適期田植：田植は日平均気温で稚苗13℃、中苗14℃以上の日とし、できれば日中の最高気温20℃以上の日に実施し、最高気温15℃以下の日は田植を行わない。
- ・分げつを確保する栽植密度、植付本数、植付の深さ：植付本数は稚苗で4～5本、中苗で3～4本とする。強勢茎を主体に穂数を確保するためには、栽植密度を21.2株/m<sup>2</sup>以上とし、植付深さは稚苗は2cm、中苗は2.5cmとする。
- ・活着を良くする水管理：田植直後は水深を4cm程度とし、保温効果を高めるためできるだけ湛水状態を保つ。
- ・分げつ発生を促進する水管理：活着後は浅水管理とし、水温と地温を高め日気温較差を大きくする。このため、かん水は水温の低い早朝に行う。
- ・有効茎歩合を高めるための水管理：目標穂数と同等の茎数（県北では450本/m<sup>2</sup>程度）を確保したら、中干しにより以降に発生する弱勢茎を抑制する。
- ・登熟期間の強風への対応：出穂後、フェーン現象など乾燥した風が強く吹送する場合は、水分の急蒸散を防止するため湛水管理とする。

### (3) 斑点米カメムシ類対策

近年は、作付面積の大規模化や複数品種の導入等により、ほ場毎の生育状況に合わせた適切な管理ができていない場合も見受けられます。平成30年は、ここ数年の中では斑点米カメムシ類の被害は少なかったと見られますが、今一度適切な防除対策について確認してください。

### (4) 雑草防除

ここ数年、本田内にノビエやホタルイなどの雑草発生が目立つほ場が散見されます。除草効果を高めるためには、畦畔補修等の漏水対策、田面の均平を図り十分な水深を確保します。また、代かきから除草剤散布まで日数を空けすぎないことも重要となります。

雑草の発生始期は非常に小さく、畦畔から見えません。畦畔から見える頃には散布適期を逃していることが多いので、見える前に散布します。